

目的 形態面で核家族化が進んでいるだけでなく、老人と子家族が同居する場合にも、親子の生活内容を分離する傾向が強まっている。老人は一般に保守的で、社会規範へ同調しようとする傾向が強いといわれる。夫婦家族制イデオロギーが浸透し、子家族から老人が排除されていく反面、依然として老人の性愛や結婚を抑圧する社会規範が存続することが、老人の孤独や生きがい喪失の状況をより一層深刻なものにしていると予想される。老人の性愛や結婚について他の世代がどう考え、老人自身はどう対応しているのかという両側面から、更に、性の相違による二重規準の存否に留意しながら、老年期の性規範の問題にアプローチした。本報告ではそのうち、若い世代の老人観の分析を通して、老年期の性規範の実態と変化の可能性について検討する。

方法 ライフステージの異なる世代間の比較を意図し、小学校高学年生の父母と大学生を調査対象に選んだ。調査は、昭和57年5～6月に、北九州市内の小学校と勤務大学で行なった。分析標本数は、小学生の父と母486票ずつ、男子学生388票、女子学生415票。

結果 世代と性別に関係なく全般的に、老人の結婚について、一般論と具体論とも反対よりも賛成が多い。老人の孤独や不自由を解決するために、まず、親子の結合を強化すべきだと考える者は極めて少ない。そのことと関連して、老人の異性関心や性欲を罪惡視する者も予想外に少ない。老人の性愛や結婚に対する社会的な抑圧は、老人の性に関係なく、少なくとも理念上は崩れてきているといえる。